

平成 30 年度「産業社会と人間」実践報告

「産業社会と人間」委員会 今野良祐・吉岡昌悟・對崎加奈子・斉藤真吾
安藤 愛・古家幸瑛・多田省吾 ・藤野昌哉

「産業社会と人間」は総合学科の原則必履修科目である。生徒は「科目選択」と「多様な体験」を通じて、キャリア意識を涵養しながら総合学科の具体のカリキュラムをデザインする。一方、SGH の取り組みにも顕著に見られるように「課題研究活動」の重要性は近年高まり続けているが、今年度はその基礎の部分に関しても、時間数減の中で本科目が担い、加えて、本学年が大学入試改革の施行学年であることも見据えて、カリキュラムの整理を必要とした。本報告では、その取り組みを紹介する。

キーワード キャリア教育 課題解決型学習 カリキュラム 総合学科 精選

0. はじめに

本年度の「産業社会と人間（以下、産社）」を実施するにあたって、1 年次担任団（本校では「産業社会と人間」委員会は 1 年次担任団が兼ねる）には大きく 2 つの課題があった。1 つ目は、この学年が大学入試改革（以下、新入試）の施行学年であり、従来の目標に加えて、やや流動的な改革内容を見すえて「産社」の内容を整えていかななくてはならないこと。そして、2 つ目の課題は（1 つ目と逆行するようだが）、教育課程の変遷にともなって、これまで「産社」の補完科目として置かれていた「キャリアデザイン」の 2 時間がなくなり、実質週 4 時間で行われていた内容を、正味の 2 時間に可能な限り「精選」しなければならなくなったこと、である。

新入試への対応とカリキュラムの精選、この 2 つの課題意識は、おそらく多くの方々と共有できるものだと思う。この実践報告が読まれる方々の教育実践に何らかの寄与するところがあることを願って、報告する。

1. 科目の位置付けと本年度に特徴的な取り組み

1-1. 「産社」の位置付けと補完科目の変遷

当該科目は総合学科の原則履修科目であり、本

校においても総合学科の理念が内包された基幹科目として位置付けられる。当科目は昨年度までは、本校開発科目である「産業理解」（平成 12～22 年度）あるいは「キャリアデザイン」（平成 23～29 年度）と併せて、実質上 4 単位で実施していた。しかしながら、本年度より教育課程の改定にともない、当科目単独の 2 単位として実施することとなった。このような変遷は、本邦におけるキャリア教育全体の研究の進捗と軌を一にしたり、あるいは研究開発的に一部先行したりして、輻輳的に連動している。まずは、以下、その流れを概観したい。

1) キャリア教育としての「産社」の位置付け

そもそも、現行学習指導要領では「産業社会と人間」の目標等については次のように規定¹されている。

産業社会における自己の在り方生き方について考えさせ、社会に積極的に寄与し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養うとともに、生徒の主体的な各教科・科目の選択に資するよう、就業体験等の体験的な学習や調査・研究などを通して、次のような

¹ 文部科学省『高等学校学習指導要領』（2009 年 3 月）

P4 より

事項について指導することに配慮するものとする。

ア 社会生活や職業生活に必要な基本的な能力や態度及び望ましい勤労観、職業観の育成

イ 我が国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察

ウ 自己の将来の生き方や進路についての考察及び各教科・科目の履修計画の作成

このように「産社」が目指すものは非常に理念的であり、広範な内容を射程におさめる。しかしその一方で、具体的に育成したい能力や付けたい力が明示されているわけではない。この問題に対して、キャリア教育の分野では、発達段階に応じた望ましい能力や態度を明確化する試みがごく初期から進められてきた。平成 14 年には国立教育政策研究所生徒指導研究センターが「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み開発」の中で、一つのモデル例として「4 領域 8 能力の枠組み」²を提示した。この枠組みは平成 16 年のキャリア教育の推進に関する報告³によって広く知られるようになったが、一方で課題も指摘されてきた。そこで挙げられた課題と別の分野・機関による各種の能力論（内閣府「人間力」、経済産業省「社会人基礎力」など）をふまえて、平成 23 年 1 月答申⁴には「基礎的・汎用的能力」としてまとめられた。この能力は「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の 4 つの能力に、従来の枠組みを再構成したものである。次期学習指導要領では引き続き、この「基礎的・汎用的能力」に示す 4 つの能力を統合的に捉えて、キャリア教育全体の中でどのように育成していくかが求め

られている。

したがって、「産社」の位置付けは、高校段階での学び全体の中で、「基礎的・汎用的能力」に示す 4 つの能力の発達を縦軸に考慮されるべきものである。（しかも、その高校段階での学び全体は生涯を通じたライフプランの中に位置付けられるように構想されるべきである。）一方で、これらの能力は従来の枠組みを統合・整理したもので、とりわけキャリア発達にかかわる諸能力が「生涯を通じて」必要であることを考慮して再構成したものである。したがって、学校の教育活動においてキャリア教育を考える場合（特に評価などをふまえて）には「4 領域 8 能力」を通して考える方がより具体的である場合が多いと感じている。後述するが、本年度、「産社」の授業内容を精選するにあたって、また生徒に示す上で付けたい力として準拠したのも「4 領域 8 能力の枠組み」であった⁵。

2) 本校における課題意識と補完科目の変遷

このような流れをふまえて、本校の「産社」の位置づけ及びそれに対する問題意識を探っていくと、平成 11 年度までの段階で、まず意識されていたのは学習指導要領上の目標、イ項目の「不足」であったようである。

…学校と社会とを結びつける新たな学習活動が必要であると考えた。（中略）「産業社会と人間」や既存の教科・科目だけでは、社会全般に対する具体的な認識を十分に深められるとは言い難い。（中略）つまり、学校と社会の架け橋になり得る科目という命題を担って「産業理解」は構想された。（「産業理解」6 年目の実践報告」⁶「産業理解の開発理念」

² 人間関係形成能力（自他の理解能力、コミュニケーション能力）、情報活用能力（情報収集・探索能力、職業理解能力）、将来設計能力（役割把握・認識能力、計画実行能力）、意思決定能力（選択能力・課題解決能力）を指す。

³ 「各学校においてキャリア教育を推進する際の参考として幅広く活用されることを期待したい」（「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成 16 年）より）

成 16 年）より）

⁴ 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成 23 年 1 月）

⁵ なお、上述の答申においては「各学校においては、この 4 つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体の能力を設定し、工夫された教育を通じて達成することが望まれる。」とある。

⁶ 『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要第 43 集』

項目より)

その問題意識をふまえて補完科目として構想されたのが「産業理解」(2単位)であった。同実践報告には、「産業のしくみ」から始まって、「証券と株式」「日銀・東証訪問」(経済)、「情報化の功罪に関するディベート」(情報)、「排気ガスの検出」(環境)など現在では見られない興味深い学習内容が報告されている一方、「福祉講話」「特別支援学校交流会」(福祉)や「筑波大訪問」など現行の「産社」のカリキュラムの中に統合されていた内容があることがうかがえる。「産業理解」自体は「平成12~14年度文部科学省研究開発学校」の指定を受けて開発されたものなので、この時点では「我が国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察」を促すための具体的な授業実践の開発を目指したものであった。

平成23年度には、「キャリアデザイン」が新たに科目として設置された。「産社」本体には前年までの「産業理解」の中身が精選されて「産社」の中に盛り込まれるようになった。これは、新学習指導要領の告知(平成21年3月)を受けて、新たな教育課程の編成を検討した結果、設定されたものだが、ここでの問題意識は、「社会生活や職業生活に必要な基本的な能力」を具体化して、身につけるためのカリキュラムであったようである。

…科目の目標については下記3点を掲げた。いずれも「スキルの獲得」を生徒に意識的に伝えることをめざしている。

- (ア) 本校での学びを進めるための基礎力(学びのスキル)を身につける。
- (イ) 場面に応じた行動を取る能力(ソーシャル・スキル)を身につける。
- (ウ) 自己の生活をコントロールできる能力(マネジメント・スキル)を身につける。
〔平成23年度「キャリアデザイン」実践報告⁷より〕

その為の手段として土曜の時間帯に「1年次の通常の授業展開では難しい「少人数授業」を実現し、「学ぶ楽しさ」を生徒に実感させるとともに、総合学科における学びのスキルを獲得させ、中高接続をスムーズにおこなうことをねらい」とするゼミ形式の課題解決型の学習を展開し、また「学習活動の記録」をつけて毎回の授業で担当者に提出することで、生徒の普段の生活(学びの姿勢)を確認していた⁸。これらは言い方こそ違いますが、前節の「基礎的・汎用的能力」のうち、(ア) 学びのスキルが「課題対応能力」、(イ) ソーシャル・スキルが「人間関係形成能力」、(ウ) マネジメント・スキルが「自己管理能力」にそれぞれ対応していることがわかる。しかも、その(ア) 学びのスキル(=課題対応能力)自体の中身も相当程度具体化されている。たとえば、1授業(ゼミ)の流れは必ず次のようなステップを踏むことが共有されていた。

- ①アイスブレイク：グループ内でのラポール(親密な信頼関係)を形成し、あとの活動を楽しく親密な雰囲気で行われるようにする。
- ②「知る(調べる)」：講義・文献調査・ビデオ視聴等を通して、テーマについての知識・理解を深める。
- ③「考える(整理する・まとめる)」：ディスカッション・アンケート調査・インタビュー活動などを通して、テーマについてより深く考察する。
- ④「発表する(伝える・発信する)」：考察したことについてレポートを作成するとともに、グループ内で発表活動を行う。また、他者の発表を聞き評価する。
- ⑤「批評する(評価する)」：自己評価や相互評価活動を通して、パフォーマンスや作品を客観的に評価したり他者との論戦を通して

(2005) P45

⁷ 『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要第49集』

(2011) P.P.15~16

⁸ 同上、P15

完成度を高めたり今後の方向性を考える契機とする⁹。

ただ、このような平成 23 年度の開発時点で考えられていたことは、実際の運用を通して徐々に「付きたい力」が焦点化し、変容していく。具体的には平成 25 年度には既に「学びのスキル」の獲得、つまり、課題対応能力の育成に「キャリアデザイン」の目的は焦点化されることとなった。その他の「ソーシャル・スキル」は「産業社会と人間」に、「マネジメント・スキル」は平時の生活指導の領分に整理されている。この課題対応能力の育成への傾斜は現在まで一貫して踏襲されている。一方で、平成 24 年度の時点で、従来「産業理解」で担っていた「社会に対する関心と知識」の部分の減退と、そのことが生徒の情報収集などの行動を減退させていることなどへの危惧が示されている。

やや長く紙幅をとってしまったが、ここまでの理路を整理すると、①「産社」は本校におけるキャリア教育全体の基幹として置かれ、②キャリア教育の分野全体で、望ましい能力や態度は整理されている。そこで、③本校では 3 年間を通じて、それらの能力を発達段階に応じて総合的に育成を目指してきたが、④それらの能力は「産社」だけでは補いきれず、補完科目の 2 単位が設定されてきた。⑤補完する能力に関しても変遷が見られ、近年は補完する内容として「課題対応能力」に重点化され、1 年次段階である程度の育成を目指している。

こうした変遷をふまえて、本年度は⑥（平成 23 年度に「産社」「産業理解」の中身を精選して次期「産社」の中に盛り込んだように）カリキュラムの中身を「付きたい力」をベースに「産業理解」や「キャリアデザイン」の中身を取り込みつつ精選することを試みている。

1-2. カリキュラムの精選と年間計画

では、具体的にどのようにカリキュラムをデザ

インしているかを見ていきたい。稿末〈資料 1〉が今年度の年間計画である。カリキュラムのそれぞれの内容は、次項の実践報告に譲るとして、それぞれの活動内容を、前述の「4 領域 8 能力の枠組み」で主としてねらいとする「付きたい力」に応じて配置した模式図が〈資料 2〉である。従来の「様々な体験」を維持しながら、問題となる「課題対応能力」の育成に「ヒアリング」「アカデミックスキルズ」、また校外学習の中に「課題研究」を配するなどして補完に努めた。一方で科目選択に向けてキャリア意識の涵養は必須であるので、進路ガイダンスなどには HR の時間を随時活用する、社会人講話を土曜日に実施するなど弾力的な運用を試みて、実施した。

ただ、精選初年度の弊害として、学期によっては各単元が輻輳的に進行するようなことも生じ、生徒によっては、いま何を目的として活動が行われているのかわかりづらいという声も聞こえてきた。そこで〈資料 3〉はそのような事態を受けて、長く「産社」の標語として愛唱されてきた「自己を知り、他者を知り、社会を知る」の枠組みを軸に学びの向かう方向性を「職業」の観点を加えて生徒に提示したものである。

2. 今年度に特徴的な取り組み

これまで述べてきた課題意識を達成するために今年度実施した取り組みのなかで特徴的なものをあげる。

(1) 思考力・判断力・表現力の育成

ひとつ目は、次期学習指導要領の柱のひとつである「思考力・判断力・表現力」を付きたい力としてカリキュラムの目標に組み込んだことである。「知識・技能」は各教科・科目の領分として、また「学びに向かう力」はまさにキャリア教育、「産社」の本来的に担うところであるが、従来「キャリアデザイン」などで補完されていた部分を、とりこんで実践しようということである。次項の「実践報告」に後述するが、ヒアリングの「B 項

⁹ 同上、P16

目」の設問の工夫や「課題研究」に関連して行われているものがこれにあたる。

(2) 学びの蓄積—eポートフォリオ

(3) 学びの可視化—紙ポートフォリオ

2つ目、3つ目は表裏の関係にあるが、紙を媒体としたポートフォリオは従来、生徒の形成過程を可視化し、評価するものとして「産社」以外でも本校では利用されてきたものである。一方で、入試制度の改革、調査書に特別活動の記録が分量にかかわらず付けられるようになることや、各大学の入試でも、地域での交流活動など、エビデンスをともなった活動評価の機運が高まっていることをうけて、近年はeポートフォリオへの期待が高まっている。本校でもベネッセ社のClassiを用いて課題の提出管理や、情報の発信などを今年度から実施した。保存の簡便性や多量の保存に耐えること、検索が容易であることなど利点も多い。一方で、今年度は紙媒体のファイルも相変わらず稼働させており、特に学期末のファイルの整理は重要な学習と位置付けている。紙ファイルには圧倒的な可視性があり、通時的にも、(内容の)段階的にも成長の過程的にもフレキシブルに配置が可能で、その為の整理を通じて、生徒は学びの内面化をはかることができる。(実際に科目選択の前には、生徒にファイルの内容を「近い未来(科目選択・2・3年次の高校生活)」、「中くらいの未来(卒業後)」、「遠い未来(生涯にわたって・理想)」に分ける活動を課した。)この点は、残念ながら未だeポートフォリオは追いついていない。そこで、今年度はこれらを併用することで互いの弱点を補う形を構想した。

以下、これまでの内容をふまえて活動の実際を報告したい。

3. 実践報告

3-1. コミュニケーションキャンプ

1) 目的

本校では、入学式の翌日から長野県黒姫高原において、3泊4日の宿泊実習として「コミュニケ

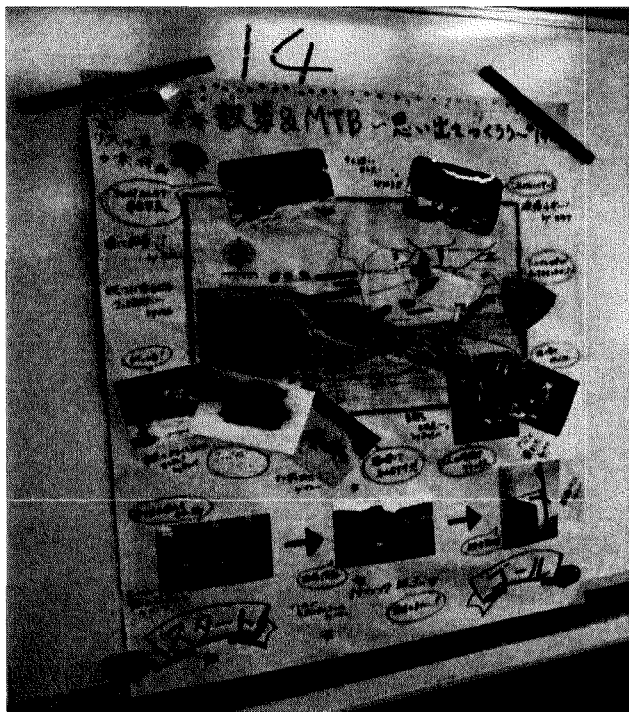
ーションキャンプ」を例年実施している。コミュニケーションキャンプは、本校で学校生活を送るのに求められる生活習慣のガイダンスとしてだけでなく、「産業社会と人間」の第1回目の授業として位置づけられ、以下の3つの目的を達成するための役割を担っている。

- (1) 総合学科の生徒として、これから様々な選択や意思決定をしていく上で必要な素地を養う。
- (2) 自身、他者がもつ個性や多様性を尊重し、受容することができる態度を養う。
- (3) これからの高校生活における目標を思い描き、達成しようとする意欲を養う。

これらの目的は、総合学科の学びにおいて不可欠な生徒の主体的・対話的な学習や、個々の生徒による科目選択や将来の職業選択を見据えた学習のための素地を養うことを指向したものである。したがって、コミュニケーションキャンプにおいては、入学して間もない生徒同士が協働して活動するアクティビティを重要視しており、これらの活動を通して生徒のコミュニケーションスキルの醸成を図っている。班編成においてもクラスや性別を問わず、クラス・男女混合の10名による活動班を16班編成し、それぞれの班に外部団体のインストラクター1名がファシリテーターとして配置する。

本校では例年、コミュニケーションキャンプの活動プログラムの計画は、担当する年次教員の裁量によって決定される。今年度、本年次がコミュニケーションキャンプの企画検討においてとりわけ重視したことは、生徒が自身の学びの過程を振り返る活動である。文部科学省(2017)「2021年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」においては、近年の大学入試改革の一環として、大学へ提出する調査書を始めとする書類について、高等学校における生徒の学習状況の様子や特別活動の具体的内容や期間等の詳細な記述を

求めている。この高大接続改革の趣旨として、生徒の「学力の3要素」を多面的かつ総合的に評価することが挙げられ、例えば現行の調査書の「指導上参考となる諸事項」の欄が拡充され、記載する項目が細分化される等、高等学校在学時における生徒の諸活動を全て記載する必要がある。本校においても、本年次よりeポートフォリオを活用して、生徒の学びを電子データとして蓄積することになり、生徒が自身の学習活動や特別活動の内容をきめ細かく振り返り、記録することを習慣づけることが喫緊の課題となっている。こうした背景を踏まえ、今年度のコミュニケーションキャンプでは、生徒の活動班毎にカメラを貸与し、諸活動の中で適宜記録を蓄積させ、振り返りの活動の中でコミュニケーションキャンプにおける学びの過程をコラージュとして模造紙に作成させる活動を導入した。



2) 活動内容

下記の表1は、今年度のコミュニケーションキャンプの活動内容を時系列で表したものである。紙面ページの都合上、例年と活動内容がほとんど変化していないアクティビティの詳細に関しては割愛するが、ここでは生徒による振り返り活動について述べる。

1日目の夜の講義の中で、2日目、3日目に行われるマウンテンバイク・ツーリングと森散策での活動をコラージュとして作成する旨の説明をした。生徒への指示内容としては、コミュニケーションキャンプにおける各班員の目的意識の共有、コラージュ作成に必要な素材（どのようなことを書くか等）の検討、写真は1班につき10名以内とする制限の説明であった。そして、プログラムが終了した3日目の夜に各活動班で振り返り活動を実施した。振り返り活動は、①個人内での振り返りをしおりに記載する、②個人での振り返りを基に、班で共有する、③班での活動の振り返りを模造紙に作成する、という手順でおこなった。翌日4日目の午前に、各活動班が作成した模造紙を掲示し、生徒全員が全ての活動班の模造紙を評価した。

〈表1 今年度のコミュニケーションキャンプの活動内容〉

	時間	プログラム	内容
1日目	午前	移動・自己紹介	自己紹介カードに基づいて、氏名、キャンプネーム、意気込み等を一人1分以内で発表する。
	午後	アイスブレイク	インストラクター主導による集団活動プログラムを実施する。
	夜	講義「コミュニケーションキャンプの目的と内容」	総合学科における学びの概要およびコミュニケーションキャンプの活動内容を説明する。
2日目	午前	マウンテンバイク・ツーリング(奇数班)	ルートを班員同士で検討させ、マウンテンバイクで約30kmを走行する。
	午後	森散策(偶数班)	指定された地図上の目的地へのルートを検討させ、地図とコンパスを用いて到達する。
	夜	百人一首	クラス対抗で実施し、勝敗によって4日目の飯盒炊爨の食材が変わる。
3日目	午前	マウンテンバイク・ツーリング(偶数班)	2日目と同様
	午後	森散策(奇数班)	
	夜	班別振り返り	2日目、3日目の活動の振り返りをし、モンタージュを作成する。
		室内レクリエーション	※当初はキャンプファイヤーを予定していたが、悪天候につき変更。
4日目	午前	振り返り全体共有	班毎に作成した模造紙を全体で共有する。
		飯盒炊爨(カレー作り)	班毎にカレーを作り、食事する。
	午後	移動・帰宅	一人一言感想を述べる。

3) 成果

生徒には、コミュニケーションキャンプ前の平成30年4月3日(入学者説明会)に事前アンケート(N=163)を、コミュニケーションキャンプ後の平成30年4月12日に事後アンケート(N=161)をそれぞれ実施した。事後アンケートにおける質問項目は以下の10個である。なお、事前アンケートにおいては「これまでのあなたはどうかであったか」という意味合いで、各質問項目の表現を一部変えている。

[質問項目](事後アンケート)

- ① 慣れない人々や環境の中で活動することの緊張や不安が解消されましたか。
- ② 性格や将来など、自分自身のことを改めて考えることができましたか。
- ③ 人に言われてするのではなく、自分で考えて行動することができましたか。
- ④ 困難なことがあってもあきらめず、最後までやり遂げようと努力することができましたか。
- ⑤ 課題や問題を見つけ、解決や改善に向けて行動することができましたか。
- ⑥ いろいろなことに興味を持ったり、新しいことへの挑戦を楽しんだりすることができましたか。
- ⑦ 他の人に自分自身の気持ちや考えをことばで

伝えることができましたか。

- ⑧ 相手の身になって気持ちを理解したり、助け合って活動したりすることができましたか。
- ⑨ メンバーの特徴や状況を考え、よりよいグループにするために協力することができましたか。
- ⑩ グループ活動を円滑に行うために、進んでリーダーシップをとることができましたか。

生徒にはこれらの質問項目について、4段階のリッカート尺度（4：そう思う、3：ややそう思う、2：あまりそう思わない、1：そう思わない）で回答させた。各質問項目の平均値は表2の通りである。

事前アンケートと事後アンケートの結果と比較すると、項目①は0.42ポイント、項目③は0.44ポイント、項目④は0.55ポイント、項目⑦は0.59

ポイントの上昇がそれぞれ見られた。とりわけ、項目③、⑦に関しては、総合学科での学びに求められる主体的・対話的な学習の実現に向けて、生徒の学びの姿勢が形成されたことが窺える。その一方で、項目⑩に関しては、事前アンケートの評価値が2.25ポイント、事後アンケートの評価値が2.40ポイントと低い水準であった。ほぼ初対面の班員とのグループ活動の中で自ら進んでリーダーシップをとれるかどうかは、生徒自身の性格によるものが大きいと考えられるので、3泊4日という短期間のプログラムでの大幅な改善を期待することは困難ではあるが、アクティビティの中で必ず一人1回はファシリテーターとしての役割を果たすように内容を検討することは可能であろう。今後の課題としたい。

〈表2 コミュニケーションキャンプにおける事前・事後アンケートの結果〉

種別/回答	4	3	2	1	平均	種別/回答	4	3	2	1	平均
事前1	60	66	26	11	3.07	事前6	83	61	16	3	3.37
事後1	88	64	7	1	3.49	事後6	107	46	8	0	3.61
事前2	57	75	27	4	3.13	事前7	29	65	55	14	2.67
事後2	50	82	27	2	3.12	事後7	68	69	22	2	3.26
事前3	21	72	66	4	2.67	事前8	54	93	14	2	3.22
事後3	38	103	19	1	3.11	事後8	68	80	11	2	3.33
事前4	34	96	30	3	2.99	事前9	55	92	14	2	3.23
事後4	95	58	6	1	3.54	事後9	64	77	19	1	3.27
事前5	26	97	37	2	2.91	事前10	13	45	75	30	2.25
事後5	44	84	31	2	3.06	事後10	20	42	81	18	2.40

（註1）各アンケートの回答数Nは、事前アンケートはN=163、事後アンケートはN=161である。

（註2）事前5に関しては、未回答が1あるため、N=162である。

（註3）事後1、事後4に関しては、未回答がそれぞれ1あるため、N=160である。

3-2. 菜園作り

産社での校内活動の始まりとして「自己を見つめる」ために位置付けているのが菜園作りである。畑作業を通して食物の大切さと喜びを感じることはもちろんのこと、作物の生育調査を通して、学校生活の自分の変化と植物の生長を照らし合わせ、これからの学校生活に向けて自分を振り返ることを目標として掲げている。

本年度は、生徒がトウモロコシ、保護者および教員がエダマメの栽培を行った。生徒は1班 8～9名のグループで管理を進めていくが、授業としては4月に播種、5月に間引き、7月の収穫祭のみである。教員からの指導は適宜入るが、その他の管理については生徒たちの自主性および班のチームワークに任されており、班内でコミュニケーションと取って水やり等の当番を決め、その結果が生長や収穫量に現れることとなる。特に本年度は気象の影響も受け、台風の影響で苗が倒れたときは土寄せをし、猛暑で雑草の伸びは早く、生徒たちは作物の生長に一喜一憂しながら共に1学期を過ごしてきた。さらに、新しい取り組みとしてはClassiを用いた生育調査、報告を行ったことである。調査レポートや観察した際の写真等の提出をアプリで行うことで、生徒—教員間のみならず、生徒間での情報共有が可能となると同時に、生徒の学びのデータとして蓄積することでポートフォリオの機能も果たす。



写真：トウモロコシの苗の生育調査

収穫祭の際には、栽培の面白さや収穫の喜びを感じることはもとより、班ごとの管理の結果がは

っきりと現れたトウモロコシを前にして、班としての活動を振り返り、また自分の行動の振り返りの機会となった。

3-3. 職場訪問

1) 社会人講話「プロフェッショナルの話を聞く」

昨年度に引き続き、生徒の保護者に呼びかけ、社会の第一線で活躍されている方の代表として講話をお願いした。「社会・仕事を知る」の単元の一つであるこの講話は、自分カルテの作成やグループでの話し合いを通して自身の生き方や大切だと思ふことをまとめた活動と、夏休みに実施する職場訪問をつなぐ役割を果たしている。生徒にとってもっとも身近な大人である保護者が語るからこそ、職業に対する思いや人生観などが心に響き、単なる職業理解を超え自身の生き方と働くことをつなげて見つめる機会となる。保護者の方に事前に趣旨を説明し協力をつのった結果、今年度は11名の多彩な分野で活躍される講師をお招きすることができた。当日、生徒は関心が深い2つの講話を選んで聞いた。講師の方々は親と社会人という2つの視点を絶妙に織り交ぜながら、まさに今この時期の生徒に必要な話をわかりやすく語ってくださり、どの会場でも熱心に聞き入り質問する生徒の姿が見られた。また、参加した保護者からは、生徒の前で語ることで自分自身と職業の関わりを改めて見直す良いきっかけになったとの声が多数あがった。通常、保護者が授業に参加する場合は見学形式が多いが、今回のような共に授業を作る形式は多面的な効果が得られることを実感できた単元であった。



2) 夏期職場訪問～報告会

社会人講話をふまえて、今度は自分たちが職場を訪問させていただき、自分たちの関心のある仕事の実際や働くことを体験させていただく「職場訪問」を夏季休業中に実施している。職場訪問は、実際の社会に目を向け、自らの足で社会に踏み出していく大切な機会である。また、訪問する職場は自分たちの関心のある職業分野であることから、自らの将来や生き方を考える機会ともなる。

6月以降の授業では、自分カルテに書かれた関心のある職業分野に従って、同じような関心を持つ生徒を3～6名程度のグループに分け、希望訪問先を考えさせた。昨年度から生徒自身が訪問先を決め、アポどり交渉から計画・実施までを主体的に行うという方法に変更している。変更の理由としては、学校側が用意した体験先に生徒の希望する職種がなかったり、受け入れ数等の関係から第1希望の体験先でなかったりして意欲的に取り組めない生徒がいたという従来の問題を改善することを意図している。また、分野によっては企業や事業所等の訪問が難しい場合は、大学や専門学校、研究施設などにおいて専門家の方に取材をさせていただき形での訪問も許可している。

希望訪問先が固まったグループから計画立案書の作成に取りかかる。担当教員の許可を得たグループは、自らアポどりの電話を入れ、訪問趣旨の説明と日程調整を行う。中には、複数の職場から立て続けに断られたり、内諾を得ていたのに急遽キャンセルになってしまったりとなかなか訪問先が確定せずに苦しんだグループもあった。必

要があれば学校からの訪問受け入れの依頼書などの手続きは教員が行い、生徒の主体的な活動を後方から支援した。訪問先が確定したグループは、最後に訪問計画書を作成して、当日の職場までの交通手段、体験内容、質問内容など改めて職場訪問全体の計画を立てさせた。そのうえで、現実的な計画になっているか、グループ全員が主体的に取り組んでいるかなどを確認する事前指導を兼ねた審査会（集団面接）を実施する。

今年度は表に示したように35の事業所等に訪問受け入れを許可していただいた。数時間から丸一日の訪問受け入れ（可能であれば職業体験）をさせていただき、訪問後は、Classiを用いて訪問完了の報告と当日の写真を提出すること、そして訪問後1週間以内に記録シートとお礼状を提出させることとした。

夏季休業が明けて9月の授業では、夏季休業中の職場訪問での学びをポスターにまとめ、ポスターセッションによって学びを共有する。ポスターセッションは1発表当たり15分として、35のグループの発表を4つの時間帯に割り振り、多くの職場について報告が聞けるようにした。職場訪問およびそのふりかえり・ポスターセッションは、希望する職業分野に進むためには、どのような進路が望ましいのか。また、その進路を実現するためには高校でどのような学びが必要なのか。社会で生きていくにはどのようなスキルを身につけておくべきかなど、今後の生き方について多面的に考える契機となっている。



写真 職場訪問での活動の様子

〈表3 実際に生徒が訪問した事業所等〉

関越病院	JICA地球ひろば
イムス富士見総合病院	サンリオピューロランド
光の家医療センター	HIS川越支店
千代田保育園	ガーデンヒルズ迎賓館
みのり保育園	講談社
上広谷児童館	ルネサンススポーツクラブ西国分寺
坂戸市教育委員会学校教職員課	警視庁
日本科学未来館	天使の林檎
日本工学院八王子キャンパス	ラ・プラージュ大宮店
埼玉トヨタ鶴ヶ島店	ソニーミュージックインターテインメント
JAXA 本社・調布航空宇宙センター	スタジオマリオ
株式会社日立システムズ	キングレコード
一般社団法人コピュータインターナショナル協会	所沢市民文化センター ミューズ
岩瀬アトリエ	埼玉県農業技術研究センター
テレビ東京	加藤牧場
teamLab	陽子ファーム
インタースクール東京	佐島牧場
埼玉県動物指導センター	東武動物公園

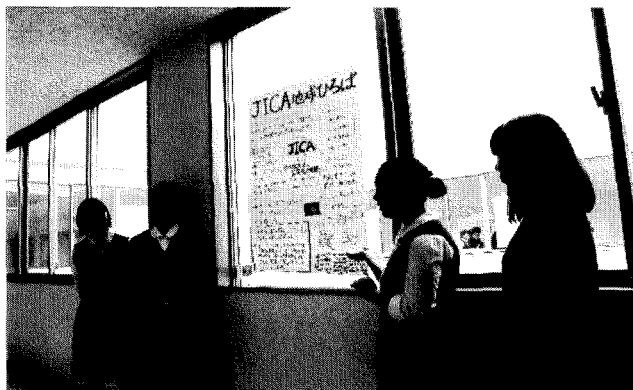


写真 職場訪問ポスターセッションの様子

3-3. ヒアリング

1) 目的

「ヒアリング」は面接官1人に対し生徒5人によって行われる本校独自の口頭試問のことである。もともとは、本校の「文部科学省指定：平成15～17年度研究開発学校」で開発された科目「起業基礎」(平成15～22年実施)において開発され、取り組まれてきたものである。教科「産業」の授業では、定期考査を実施することはなかなか容易ではないし、様々な体験をしてきた生徒に対して一定の「知識」を問うような筆記試験は必ずしも有効ではない。そこで、普通教科や専門教科とは一味違った評価の工夫としてヒアリングは実践されてきた。ところが、実施自体は散発的で、管見の限りでは、前述の「起業基礎」、「平成26年度産業社会と人間」、「平成29年度卒業研究」などでしか実践報告が残されていない。また、カリキュラムとしての位置づけも整理されておらず、運用面での実践報告は豊富にあるのだが、カリキュラムとしての目的が学年によって「まちまち」であるのが実態であったようである。

これまでの位置づけは、第一に、考査がない科目の多い教科「産業」に「学期全体のふり返りの契機」とするものである。実際に、生徒は自身のヒアリング時以外の待ち時間の課題は学期をふり返っての「アンケート」や「まとめ」の記述が課されることが多く、「相互にふり返りの効果を高める」ことがねらいであることがうかがえる。第二は、単純に表現力の向上を期待してのもの。学びの成果などを口頭でまとめて発話することが多いために、自己PRや課題研究の発表などのスキルに対しても親和性が高く、同時に試験の緊張感の中でこれらを発揮するという面で、面接試験などを想定しての現実的な進路対策という一面もあったようである。そのほか第三に(瞬発的な)思考力を育てるという目的を掲げている年度もあった。

こうした推移をふまえて、今年度はヒアリングの目的を次のように整理した。

① 学期全体のふり返りの契機

② 表現力・思考力の向上

③ 「付きたい力・学習のねらい」の発信と共有

③を加えたのは、「活動あって学びなし」の状態を避けるためである。通常、教科「産業」科目は体験や活動が多く、そこが魅力でもあるが、一方で、生徒にとって学習としての位置づけが十分に為されない場合や、その為に自らに学期ごとの「評価」の理由に納得ができなかったり、その評価の理由を軽視したりする場合がある。そこで、ヒアリングの質問によって、評価者側の観点を「発信」し、「学習」として生徒自身をして、思考する中で自身の中に落とし込ませる機能が重要だと考えたのである。

そこで、質問項目をA・Bの2種類に分け、1つ目の質問（A項目）で、学習のふり返りと評価者側の意図を考察できるような設問（たとえば、第3回実施のA項目は「あなたの将来について、遠い未来（○○○な「人間」になりたい、理想）、中くらいの未来（高校卒業後どうになりたい、何をしたい）、近い未来（高校在学中に○○を学びたい、時間割選択）の3段階に分け、それぞれの内容を関連させて述べなさい。）、2つ目の質問（B項目）で、思考力を問うような設問（たとえば、第2回実施のB項目は「事前に配布した3つの時間割選択の例がどのような意図で選択されているか、話し合いなさい。その上で、グループとして「時間割選択を行う上で大事なポイント」を1～3つ程度の内容にまとめなさい。」）をすることにした。B項目については、次期学習指導要領の内容をふまえてのもので、複数の情報を比較したり、総合したりするような設問や抽象的な概念を自らの学びや生活と結びつけるような設問としている。以下は具体的な運用について報告する。

2) 実施方法と内容

年5回の実施を目指したが、先述の時間数の削減もあり、本年度は年4回の実施となった。実施の詳細については稿末（資料4）の教員マニュアルに示す。教員1人に対して各クラス生徒5～6

人による集団面接の形式で、いくつかの質問（A・B2種が標準）に対して指名された生徒から簡潔に解答していく。クラスごとに20分程度の時間を設定し、指定の時間になったらグループごとに指定されたヒアリング会場に移動する。移動の際に他のクラスの生徒との接触を避けるため、廊下には誘導用の教員を配置することが望ましい。

解答の評価については、担当教員ごとに差が出てしまうのを避けるため、〈資料5〉のように評価用のマニュアルを毎回作成して、共通の基準によって評価を出せるようにする。質問の内容によって評価の観点が設けられているが、評価の方式は、生徒の解答の状況にそってフローチャート式で評価するものと、ルーブリック式で評価するものを質問内容に応じて切り替えて併用している。このように2種類の評価方法を併用することで、評価の質を担保しながら話し合いや討論の形式にしての評価も可能になっている。質問1つ当たり5点満点、話す態度、聞く態度、姿勢なども5点満点で評価に加え、質問項目数に応じて1回のヒアリングで15点満点が標準である。また、試問担当者は20分の時間の残り時間の許す限りで「講評」を行うのが望ましい。前述の評価の観点、付きたい力の共有を目指す上では大事な指導の時間となる。

ヒアリング以外の時間は、生徒は教室において「ふりかえりワークシート」に取り組むのが通常である。これらは、いわゆる定期考査の代わりとなることを生徒には伝えており、定められた時間内で毎時の授業ワークシートを見返したりしながら記述していく。ふりかえりワークシートの内容は、限られた時間の中で幅広い内容について目を向けられることが望ましく、拡散しがちな産社の学習内容を整理することや学習成果の自覚につなげたい。

3-4. 時間割作成

時間割の作成は、かなり理念的な指導要領上の目標の中でも具体的に触れられているように、「これまでの体験や学び」「自己の将来の生き方

や進路についての考察」を反映して作成することで、これ自体がキャリアプランニング活動の中核となるものである。「献立表の中から食べたいメニューを選び出すような」選択にならないようにしなければならない。そこで意識したことは次の2点である。

1) 選択する科目が具体的に想定できるようにすること

シラバスの配布、科目群主任による講話、科目群授業見学などがこれにあたる。特に専門科目に関しては、体験授業の役割は大きく、年度によってはかなりの時間数を費やしているのだが、今年度は2時間を確保することができた。実際には、2者面談を通じての担任による指導もかなりのウエイトを占めているように思われる。

2) 科目選択を一時的なものとしてとらえさせるのではなく、時間軸・生活軸の中でとらえさせること

生徒が自身のキャリア、多様な選択について考え、その中に科目選択を位置付けるようにすることを目指す。今年度は前述のヒアリングの中で、3つの選択時間割例を比較・分析して論じたり、産社ファイルへの綴じ込みに、「遠い未来」「中くらの未来」「近い未来」の中敷きを用意し、それをもとにファイルへの綴じ込みを思考させたりした。いずれにせよ科目選択をその時だけの単独の活動にしては全く意味がない。他のカリキュラムとの有機的なつながりを作ることが重要である。

3-5. 筑波大学見学会

1) 目的

平成30年改訂の高等学校学習指導要領においては、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」へと名称が改定された。この科目では、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学び」が重要視され、今の学習が自身といかに関連しているの

かを生徒自らが見出す学びがより一層強調されている。すなわち、これまでは大学において求められてきた学びのスタイルが、これからは普通科を含めた全国の高等学校において推進されていくことになろう。

筑波大学見学会は、高校での学びと大学での学びの違いを認識させる目的の下に、「産業社会と人間」において例年行っている行事である。本校入学から約半年が経過している生徒は、産社を始めとするこれまでの授業を通して、次年度から本格的に始まる総合学科における学びのための素地を身につけている。しかし、例年12月上旬に行われている来年度の科目選択を目前に控えているにも関わらず、自身の興味・関心と学問との関連性・親和性を見出せない生徒や、これまでの中学・高等学校での学びとこれからの大学の学びとの違いを認識できていない生徒が少なからずいる。こうした生徒の現状とこれからの教育界の潮流を踏まえ、今年度の筑波大学見学の目的として、以下の3つを設定した。

- (1) 大学の講義や研究施設の見学を通して、「大学での学びとは何か」を考え、これからの自身の進路選択に役立てる。
- (2) 学術研究の場としての大学を俯瞰し、卒業研究やT-GAP等の課題研究活動に必要な探究的学習スキルの素地を養う。
- (3) 筑波大学附属学校の生徒として、親大学とのつながりを認識する。

筑波大学見学会に先立って行った生徒への事前指導では、これら3つの目的と、「「大学での学びとは何か」(「学問を研究することとは何か)」について、筑波大学見学を通してあなたが考えたことを800字以上のレポートにまとめなさい。」という事後課題を明示することで、生徒が学びの見通しや目的意識を持って取り組めるようにした。

2) 日程

1日を通して実施された今年度の筑波大学見学会の内容として、

- (1) 大学教員・本校卒業生による全体講話
- (2) 大学教員による模擬授業体験
- (3) 研究施設見学・研究室訪問

の3つを設定した。

(1) 大学教員・本校卒業生による全体講話

大学教員からは、筑波大学の学群・大学院等の組織編成および大学における研究に関する講話をいただいた。また本校卒業生からは、大学で専攻している学問を深く知るためには、苦手な科目を含め、学問の垣根を越えて学ぶ必要である旨の説明があり、本校生徒にとっては総合学科における学びが大学における学びに直結することを認識することができた様子であった。



(2) 大学教員による模擬授業体験

〈表4 筑波大学見学・模擬授業体験講座一覧〉

No.	講座名
1	英語学入門
2	比較文化へのいざない
3	生物の不思議『なんでだろう?』を化学する
4	木材の基礎的性質と高度利用
5	環境問題を多様な視点から考える
6	人と人工知能
7	電気の未来

上記の〈表4〉に、今年度実施された模擬授業体験講座の一覧を示した。本校の科目群・系列を踏まえて講座を設定し、可能な限り生徒の希望に応じて受講する講座を決定した。



(3) 研究施設見学・研究室訪問

右の表5に、今年度見学、訪問した施設や研究室の一覧を示した。本校の科目群・系列に関連する研究施設だけでなく、事前調査した生徒の興味・関心に可能な限り対応できるように見学先を設定した。

〈表5 筑波大学見学・見学施設、研究室一覧〉

No.	施設見学先
1	体育総合実験棟 (SPEC)
2	生存ダイナミクス研究 (TARA) センター
3	遺伝子実験センター
4	プラズマ実験センター
5	中央図書館
6	土壌化学研究室
7	天然物化学研究室
8	農産食品加工研究室
9	量子化学研究室
10	大学院教育研究科



3) 事後レポートとまとめ

本年度の筑波大学見学会は、「1. 目的」で列挙した3つの目的のうち、とりわけ1)を重視した内容で実施した。以下に、事後課題において提出された生徒のレポート内容の一部を抜粋する。

「大学での学びとは何か」（「学問を研究することとは何か」）について、筑波大学見学を通して生徒がどのように考え、感じたのか、生徒の率直な感想を参考にしていきたい。

- ・ 一番驚いたのは、最初に行われた本校の先輩の講義の「大学での学びは科目と科目の違いがあまりない」という話だ。私は科目ごとの学びに関しても専門的な分野に分かれる為、それぞれが独立していると考えていた。しかし、実際は各科目の最終到達点が共通の内容であるというような、科目同士の繋がりが見えてくる内容であるといったことを知った。
（IG生、男子生徒）
- ・ 研究することは人の役に立つための行為であり、自分の好きなことにとことん取り組み、学ぶことで誰かを救えるかもしれないというのは素敵なことだと思いました。（IG生、女子生徒）

- ・ 私の考える大学の学びとは「自己責任」「誰かに支えてもらう」「人生の準備段階」だと思いました。私は大学進学を目指し日々勉強をしていましたが、改めて大学について考えてみると、難しい部分もあり、ほかの選択肢を考えてみるのも良いのではないだろうかと思うことができたとともに安易な気持ちで大学進学を目指すのではなく、何を学びに大学に行きたいのか考えるきっかけになりました。そしてこれを機に自分の人生計画をもう一度見直し、科目選択に向け深く考えていきたいなと思いました。（IG生、女子生徒）
- ・ 学問を研究するということは、自分の視野を広げ、そして学問を追求し、理解し、学び合いの中で深め合っていくことであると思う。私は高校時代の学びがあっこそ、大学での学びが存在すると思う。大学でより学問と身近になり深めていくために、自主性と責任を経験を通して少しずつ積み上げ、身につけなければならないと思う。（SG生、女子生徒）
- ・ 大学での学びは「学術的な分野の垣根を超えたバランスの取れた学習」であると考えている。なぜならどの学類においても他の学類が使うような技術や用語を使っていたからである。これまさにIBのコア科目にある「TOK」にとても似ている。「知の領域」には境目がなく、すべてが重なり、バランスが取れて初めて「学び」に近づけるという理論が大学の学びと共通していると感じた。（IB生、男子生徒）

3-6. 福祉講話・特別支援交流会

福祉講話・特別支援交流会は、元来「産業理解」で実施されていたカリキュラムであったが「他者を知る」ことで「人間関係形成能力・社会形成能力」の育成を図る上で重要なカリキュラムとして位置付けられ、毎年「産社」の中に組み込まれている。今年度は前段階として、「アイマスク活動」をすることや、「アサーショントレーニング」を実施した〈稿末資料6〉上で、各クラス単位での

交流活動を行った。交流活動の相手校は以下の表6の通りだが、筑波大学に多様な附属校があることを活かして、毎年実施することが出来ている。

〈表6 特別支援交流会交流校一覧〉

交流校	日程
A：坂戸支援学級	11/20（火）3・4 限来校 対応
B：附属聴覚特別支援学校	11/20（火）訪問
C：附属大塚特別支援学校	11/13（火）訪問
D：附属桐が丘特別支援学校	11/20（火）訪問

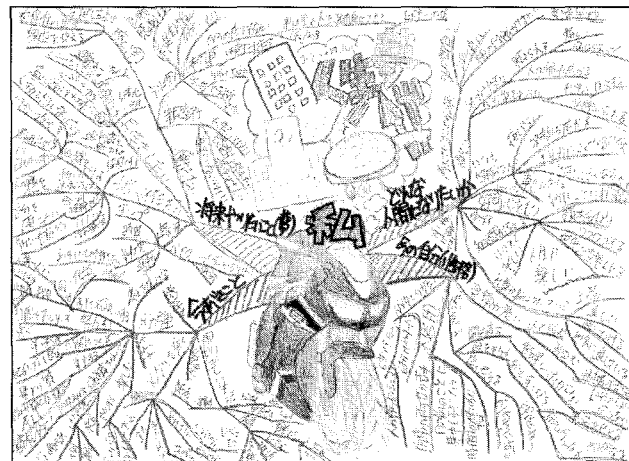
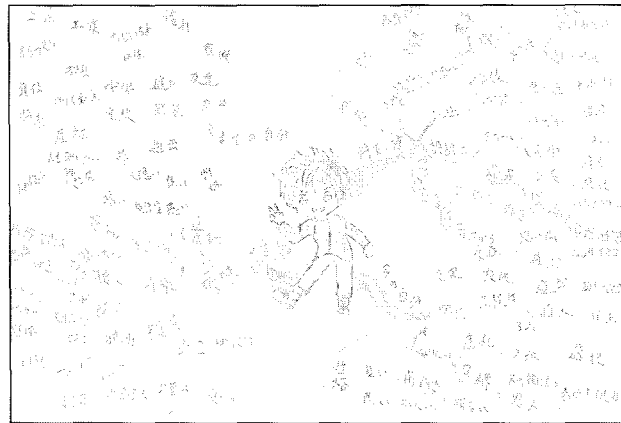
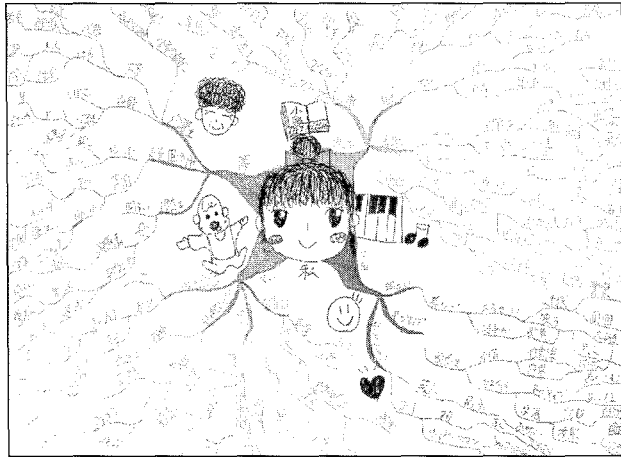
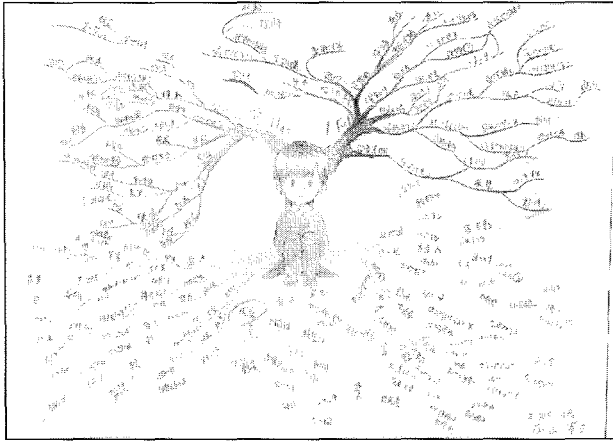
3-7. ライフプラン

3学期（本校では12月～3月で設定）の「産業社会と人間」は、1年間のまとめとしての「ライフプラン」の作成および発表が中心的な活動となる。1・2学期の「産社社会と人間」の学習では、自己を見つめ直したり、多様な他者と協働したり、職業や社会の一端を垣間見たり、上級学校を訪問するなどの経験を通して、「高校で何をがんばりたいか」「社会で生きていくには何が必要か」などを考える活動に取り組んできた。そして、それらの活動をふまえて、自分がどのような生き方をしたいのか。人生のPDCAをどのようにデザインするのか。その中でも、すべての起点となるP（夢・目標）をどのようにデザインするか。これらを「ライフプラン」という形で具現化することが「産業社会と人間」での学びのまとめとなり、2年次以降の学びや今後の人生の歩みの目標としてもらうものである。

ライフプランの作成にあたっては、自分自身のこれまで（興味・関心・適性など）をふりかえることと、近い未来（高校2・3年次）、遠い未来（高校卒業後～上級学校～社会生活）を現在の興味・関心だけでなく、自分たちが社会に出るころの社会のあり様や求められる人材像などをふまえて具体的に描く取り組みにしたいと考えている。そ

こで、「マインドマップ」の手法を手がかりに、ライフプラン作成に向けた材料集めに取り組ませた。

「マインドマップ」は、イギリスのトニーブザン氏が1970年代に開発した思考法・発想法で、センターイメージから派生するブランチに関連する単語を乗せて、そこからさらに連想するようにブランチを伸ばしていく。授業では、いきなりライフプランのマップを描かせるのではなく、一般的なマップの書き方を習得することに重点を置いた。①イルカの生態（簡易な文章に書かれている内容をマップ化する課題）、②ペットボトル（具体物からイメージをふくらませてマップ化する課題）の2種類の課題を課して、マップ化の手法を定着させるようにした。そして冬休みの宿題として、自分自身をテーマとしたマインドマップの作成とマップを元に自分のライフプランを1600字程度の作文にまとめることを課した。マインドマップは、セントラルイメージ（テーマ）から関連するワードを連想ゲームのように直観的に紡ぎだしていくものである。自分自身の中で言語化・整理されていない概念を見える化することができるのである。そして年明けになると、ライフプランのHR発表会や学年発表会でクラスメイトの興味・関心や将来像などを共有し、自己理解・他者理解を一層深めていく。中にはあまり思い出したくない過去や、自分自身の見たくない部分に向き合うことに苦悩した生徒もいたようである。一方で、そのようなハードルを乗り越えようとしている自分にも気づくことができ、前向きに作文の執筆に取り組むことができていた。そしてそのような思いを持っているのは自分だけではないということに発表会を通して気づくことができた。



〈図表7 生徒がライフプラン執筆前に作成した自分自身のマインドマップ〉

3-8. 校外学習

1) 全体の概要

カナダ校外学習は、ブリティッシュコロンビア州の都市バンクーバーで平成31年3月12日から19日の6泊8日の日程で実施した(資料1行程表参照)。過年度学年からこの時期のバンクーバーは雨が多いと聞いていたが、今年度は全行程で天候に恵まれ、全てのプログラムを滞りなく行うことができた。今回のプログラムは「ホームステイ」「現地学校との交流会」「課題研究活動」の3つを大きな柱としている。25期生はコミキャンの時から学年の目標として「Challenge! Charge! Change!」を掲げているが、この校外学習でも実際に現地に行ったからこそできる体験を大切にしたいという年次の思いがあった。そこで、生徒が自らテーマを掲げ、様々な人たちと関わりながら多文化理解はもちろん自己理解を深める体験ができるプログラムを活動の中心に据えることとした。以下、3つのプログラムを生徒の反応を含め事後報告する。

2) ホームステイ

一つ目の柱であるホームステイは、ホストファミリーとの「生活」を通して外国の習慣や文化を肌で感じることを目的としている。現地の方の暮らしぶりはホテルステイでは見ることができず、ホームステイをしたからこそわかることが多い。住環境や食事、家族のあり方など生徒にとって身近な観点から関わることで、異文化のみならず日本での自分の生活を改めて見つめる機会にもなると考え実施した。今回はバンクーバー市内から少し離れたところにあるリッチモンド地区、バーナビ地区、サレー地区の3カ所に分散し、1家庭2人で5泊行った。ホームステイ先は出発1週間前に決定、ホストファミリーの急な予定変更等により当日まで若干の変更が生じたが、多くの生徒は事前に知らされたホストファミリーのEメールアドレスに挨拶のメールを出すなど出発前から交流をしていた。

ホームステイはバンクーバーに到着した初日

から始まる。旅の疲れと緊張からこわばった表情の生徒が多かったが、ミートポイントに着くとホストファミリーが非常に暖かいウェルカムセレモニーで迎えてくださったため、多少不安な顔はしていたものの元気に各家庭へと向かった。毎日のプログラムはだいたい夕方には終わり、生徒はそれ以降翌日の朝までの時間をホストファミリーと過ごすことができる。更に、限られた滞在日数の中でできるだけ交流を深められるよう、滞在校期间中に週末を含め丸一日ホストファミリーと過ごせる日を設けた。アメリカとの国境に連れて行ってもらった家庭もあれば、友達家族とともにショッピングモールへ行った生徒、ステイ先の子どもとの友人たちと遊びに行った生徒など過ごし方は様々であった。生徒の日記を見ると、3日目くらいから英語にも慣れてきたという記入が目立った。それを考えると、あともう数日多く滞在できれば、更に気づくこと・学ぶことが変わってきたらと感ずる。多くの生徒がはじめは単語でしか話せず言葉の壁を感じたといっていたが、ホストファミリーがたどたどしい英語にも熱心に耳を傾けてくれたり、自分のいいたいことが伝わる経験をしたりする中で、日を追うごとに英語に慣れてきた様子が見て取れる。壁と思っていたものが”人と人の生のコミュニケーション”を通じて取り除いていけることを実感し、改めて英語学習への意欲を高める生徒もいた。

[生徒の反応～生徒の日記から～]

1日目

英語があまり得意ではないから、ホームステイ先で話せない不安と緊張でディナーがのどを通らなかった。また、”Don't be Shy!”と何回か言われたのが少し悔しかった。

4日目

ホストシスターの友達と遊びに行った。現地の高校生の会話や遊び方をリアルに感じる事ができた。少しずつ英語が話せるようになってきて、レストランで店員さんに声をかけて紅茶をもらうことができた。成長した！

5日目

カナダに来てからいろいろな人と話して、日本よりもしっかり挨拶したり感謝を伝えたりしていることに気づいた。初めて会った人にも名前をいって握手やハグをして、ご飯の時はつくってくれた人に感謝の言葉をいっていた。

6日目

グランマがとても優しくしてくれたので、最後ハグしてくれたときは涙が出そうだった。ホームステイのおかげで英語にも慣れたし、前よりも話ができるようになった。

3) 学校交流

二つめの柱である学校交流は、リッチモンド地区にある Richmond Secondary School と Mcroberts Secondary School に2クラスずつ赴き丸1日交流を行った。Richmond Secondary School はこの地区でもっとも歴史のある学校であると同時に、IBプログラムを導入している学校でもある。Mcroberts Secondary School はフランス語と英語のバイリンガル教育を取り入れており、芸術分野に力を入れている。どちらも工業、商業、家庭科など本校にもある専門科目も開講しており、日本の総合学科に近い印象であった。この学校交流は、同じ「高校生」同士だからできる交流があり、それが互いをより深く知る助けになるとの考えから、年次としてどうしても入れたかったプログラムである。これまで本校のカナダ校外学習は3回行っているが、現地校と交流会をするのは今回が初めてであった。他の国での交流会経験から、事前に学校間でやりとりをした上で交流会を作り上げていくものと想定していたが、実際にはリッチモンド地区教育委員会及び間に立つ現地業者を通してのやりとりしかできず、正直行く前はプログラムの全体像が見えない状況であった。しかし、実際に行ってみたところ、いずれの学校も生徒がより密に交流を深められるようスケジュールを組み、学校をあげて交流会に取り組んでくださっており、想像以上に充実した交流会となった。

交流会前半はウェルカムセレモニーを行った後、生徒1人にバディが1人つき学校を案内してもらいつつ、数学や理科、写真、調理、アート、CADなど多彩な授業に参加した。教室の作りはもちろん、授業中の生徒の参加態度や話合いの仕方など日本と異なる雰囲気や驚く声も多く聞かれた。後半は本校生徒が日本文化をグループで紹介する文化紹介を行った。訪れた現地校生徒の名前を本校生徒がひらがなに直し、それを現地校生徒本人が習字でしたためるという企画や、割り箸で鉄砲を作る企画、百人一首や2人羽織を紹介する企画、アニメ文化を伝える企画など内容は多岐に渡った。いずれの学校でも、非常に好評で現地校生徒が各ブースを楽しんでまわる様子が垣間見えた。

[生徒の反応～日誌から～]

- ・同世代の子とは話しやすかったし、日本のテレビやアニメ、食べ物を知っている子が多くて嬉しかった。様々な国の子がいて、服装も好きなものもバラバラでとても自由なところだと思った。
- ・バディがとても親切に英語を伝えようとしてくれていたのが嬉しかった。カナダの学校の授業は日本と違いドリンクを飲みながら受れたり、グループワークを多用していたりして自分の意見を積極的に話していた。
- ・英語は苦手だし、バディが何をいっているのかわからないところもあったけれど、バディの人が友達とふざけ合ったりしているところを見ると、言語がただ違うだけで私たちと何ら変わらないんだなと思った。
- ・バディと英語の失敗を恐れず多くの会話ができ、本当によかった。文化交流会では多くの人に楽しみながら日本の文化をしってもらえることができうれしかった。

4) 課題研究活動

課題研究活動は、カナダ現地での研究活動を設定し、生徒自身が課題意識と見学コースに基づいて目標設定を行う。その際に事前に活動計画書を

提示し、現地で実現可能な計画を立てることが、本年度の取り組みである。前段階として、「アカデミックスキルズ」の時間を設定し、その中で基本的な「調べ方」を学習している。図書館の活用、書籍の見方、図鑑・年鑑類の活用、論文検索サイトの利用、論文の見方、参考文献の書き方などが指導項目になる。今年度は、時間数の都合で活動も含め、2時間にかなり凝縮した内容になってしまった。「問いを立てる」〈資料7〉「問いを深める」といったプロセスを経て、生徒には活動計画書を2度にわたって出してもらった。1度目は稿末の〈資料8〉「評価シート」に採点を記入した上で返却しており、課題研究を行う上でのポイントを簡略化して発信することによって、「問いを深める」ための手だてとしている。

事後の生徒の声としては、やはり「事前の調査や研究方法の設定が甘かった」ことや「研究課題の設定が漠然としすぎていた」、「実地のコミュニケーションをとる段階で課題が見つかった」など事前に予想された困難（たとえば〈資料8〉の評価項目）がほとんどであった。事後の反省を通じて、ようやく内面化されているようではある。2年次の「T-GAP」で取り組みとしてどのように変わるかで成果を評価していきたい。

[生徒の研究課題]

ここでは生徒の特徴的な研究課題をいくつか挙げることで報告に代えたい。

○メープルシロップを日本で特産品にできるか
概要) 国産の秩父で生産されているメープルシロップの生産法や販売についてフィールドワークを行い、カナダの名産であるそれと比較研究を行う。実際にカナダでも森林での植生や販売店での扱い方などを調査した。

○日本とカナダのボランティアにおける考え方の違い

概要) 「ボランティア」が法制によって義務化されているカナダでは、ボランティアに対してどのような意識が醸成されているかを見る。実際にボランティア団体へのインタビューや活動への参加

率、意識調査を計画した。

○日本での住みやすさとは異なるバンクーバーの住みやすさ

概要) なぜバンクーバーが世界で最も住みやすい都市と言われているのか、日本の住みやすさとは異なる要因となるものを明らかにする

○若い人が海外に行くきっかけになるような観光本とは？

概要) カナダにおける日本文化に対するイメージ期待するものなどを4種のインタビュー調査をしながら明らかにする。 など

4. 課題と展望

ここまで、今年度の実践報告をしてきた。年度ごとの課題意識をなるべく継承しながら、新たな課題に取り組んできたつもりだが、やはり過渡期のやや強引な運用は否めないように思う。ただ、来年度も2単位での実施が決まっているので、今年度の報告がいずれかの参考になれば、と思う。現時点で見えてきた課題を申し送り、本稿の結びとしたい。

1) 課題量のコントロールとフィードバックの質的向上

繰り返しになるが本年度は例年の単位数の半分で実施している。その為に、カリキュラムの内容を精選しているが、これまでの研究開発の経緯からすれば、本来的に削減しきれものではない。「産業理解」的な要素や、「キャリアデザイン」の初期の構想に入っていた要素なども、「産社」が目指す生徒の望ましい達成段階を達成しようとするれば、必要だからこそ構想されてきたのである。もちろん、精選には指導内容自体を見直す効果もあるが、全体として「教員・生徒の多忙感」は否めなかった。必要な学びを担保するために「LHR」なども弾力的に運用したが、最も活用したのは課題として、時間外の時間を運用することであった。そして、そうした指導にあてる労力も結局時間外にあてざるをえない。

さらに、次期指導要領を見すえて今年度は授業の方法を見直された教員が多かった。それ自体は

たいへん良いことだが、アクティブラーニング等を念頭に置いた授業では、活動のふり返りや成果物は提出の形をとることが多くなりがちであった。全体としての課題の多さは「産社」の課題とも重なって、生徒には負担が大きかったのではないかと思う。結果として提出率が下がる、成果物の質が下がるということはなかっただろうか。

こうした問題は、今後も起こりうるはずで課題の量を全体として見すえられる立場がコントロールしていくような仕組みが今後は必要だろう。さらに大事なものは、提出された課題のフィードバックが課題の返却を通じて為されるように授業者が精査することである。懸命に出した提出物にきちんと反応がある、指導があるということが、生徒の学習への意欲を喚起する基本であるからだ。

2) 生徒との目的意識の共有

もうひとつの課題はカリキュラムのねらい、目的意識の共有である。ヒアリングなども通じて目的意識の共有や指導の内面化をはかってきたつもりであるが、やはり単元が週替わりになったり、同時並行で進んだりということが、生徒の目的意識の醸成を阻んだ部分があるのではないかと。

科目、カリキュラムの精選は「マネジメント」として、今後必要な過程であることは疑いない。ただ、「産社」が総合学科の基幹であることをふまえて、「拙速」に随していなかったか、大事な機能を失いはしなかったか、は気にかかることである。「覆水盆に返らず」の故事にもあるように一度取りやめたものを取り戻すのは難しい。「T-GAP」「卒業研究」の3年間を通じて経過を検証していきたいと思う。

〈参考文献〉

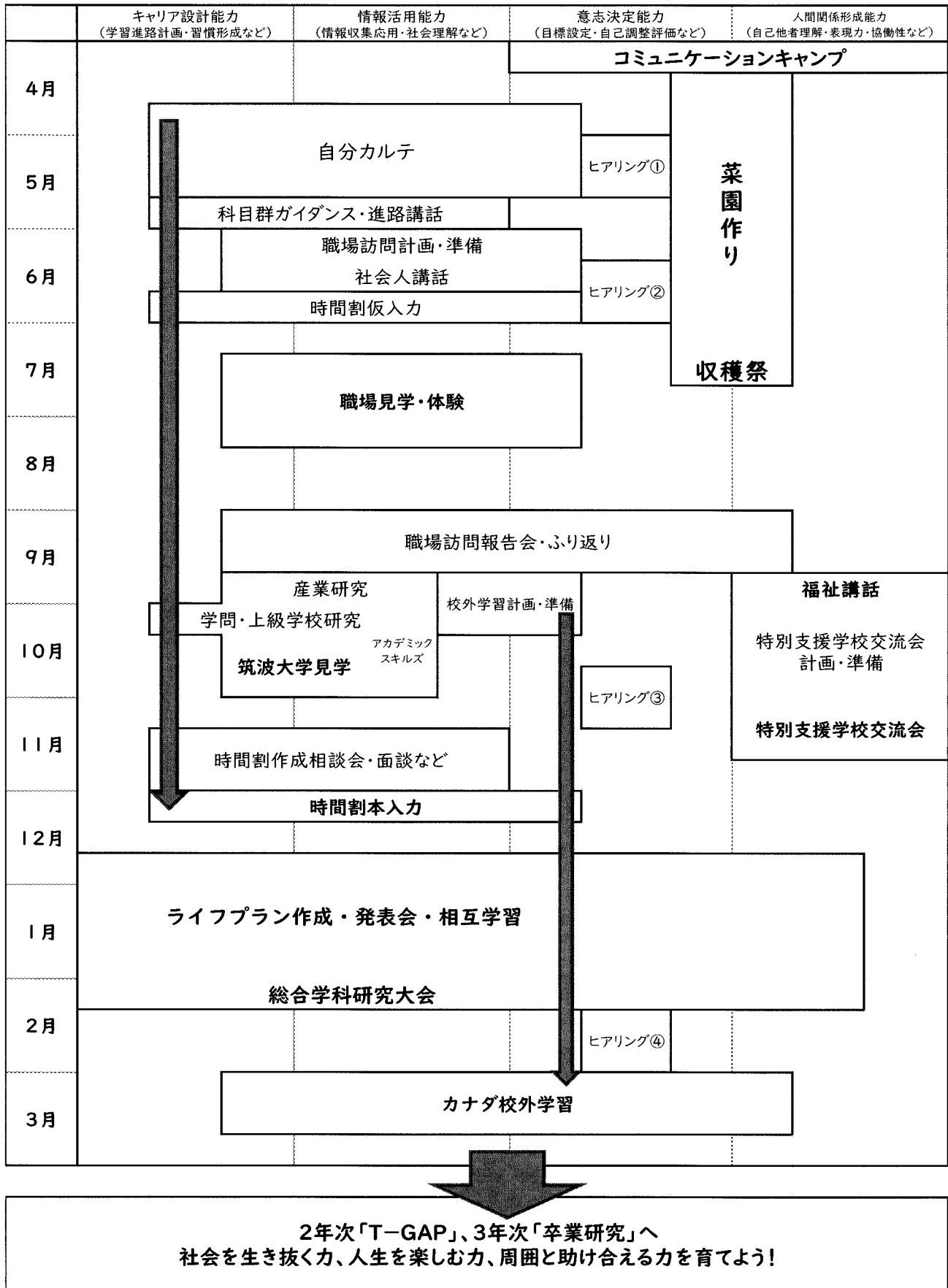
文部科学省『高等学校学習指導要領』(2009年)
文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(2004年)
中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(2011年)
筑波大学附属坂戸高等学校『研究紀要』第30～55集(1991～2017)

H30 産業社会と人間 年間指導計画

	No	月	日	主題	単元	各時限の内容	
						5時限	6時限
一 学 期	0	4	7-10	自然体験を通じて自己/他者理解を深める	コミュニケーションキャンプ	コミュニケーションキャンプ	
	1	4	13	「産業社会と人間」を知る～三年間の学び～	オリエンテーション	産社ガイドンス	
	2	4	20	菜園作りを通じて自己/他者理解を深める	協働体験	産社菜園作り(播種)	
	3	4	27	自己カルテ作成(仮)	自己を知る	自己分析ツール、アングーマネジメント	
	5	4					
	4	5	11	思考の深・広・鋭化～「学び」の共有～	ヒアリング①	A 自己理解、B観察する力・細分化する思考	
		5	18	体育祭準備			
	5	5	25	筑坂での学びを知る	学びを知る	科目群主任講話/科目選択の諸注意	
	6	6	1	自ら動き、仕事と社会を知る	社会・仕事を知る	職場・施設訪問計画～ガイドンス・アポ取り	
	7	6	8	生涯学習について考える	学びを知る	学びの計画書作成	
	8	6	9	自ら動き、仕事と社会を知る	社会・仕事を知る	保護者講話(私はこう働く、社会貢献する、「学び」への思い)	
	9	6	15	筑坂での学びを知る	学びを考える	科目群授業見学	
	10	6	22	思考の深・広・鋭化～「学び」の共有～	ヒアリング②	A 学びのデザイン、B 観察する力・発想力	
11	6	29	筑坂での学びをデザインする	学びを考える	科目選択予備調査入力	1学期振り返り	
	7	6	期末考査期間				
12	7	13	自己/他者理解を深める、社会/仕事を知る	協働体験・社会・仕事を知る	収穫祭準備& 職場・施設訪問直前指導		
13	7	14	収穫を通じて自己/他者理解を深める	協働体験	菜園収穫祭(保護者と一緒)		
	7	20	終業式				
夏期休業中			実社会の中で「仕事」を体感する 社会を知る	社会・仕事を知る	職場体験 振り返り		
二 学 期	1	9	7	体験(学び)を言語化する	社会・仕事を知る	職場体験振り返り・発表準備(ポスターセッションとは)	
		9	14	月曜授業			
	2	9	21	体験(学び)を共有する	社会・仕事を知る	職場体験報告会・ポスターセッション	
	3	9	28	世界を知る(為の方法を知る)	(国際)社会を知る	アカデミックスキル(調べ方・資料の見方)	
	4	10	5	世界を知る	(国際)社会を知る	校外学習事前指導・カナダを知る	
	5	10	12	学問と自分自身の生き方を考える	学びを考える		
	6	10	19	学問と自分自身の生き方を考える	学びを考える	筑波大見学	
	7	10	26	思考の深・広・鋭化～「学び」の共有～	ヒアリング③	A 社会・自己・学習のあり方、B 観察する力、リテラシー	
	8	11	2	筑坂での学びをデザインする	学びを考える	時間割作成相談会・時間割作成(科目群科目)	
	9	11	9	他者との関わりの中で生き方を考える	他者を知る	交流会準備(福祉講話)・時間割作成(一般選択科目)	
	10	11	16	他者との関わりの中で生き方を考える	協働体験	特別支援校との交流会準備※実施は20日	
	11	23	勤労感謝の日				
	11	30					
三 学 期	1	12	7	筑坂での学びをデザインする	学びを考える	授業時間割木入力	2学期振り返り
	2	12	14	自分が住む世界を考える	(国際)社会を知る	カナダ班別学習準備	
	3	12	15	自分が住む世界を考える	(国際)社会を知る	アカデミックスキル(調べ方・資料の見方)/カナダ班別学習準備	
		12	21	冬期直前指導			
	冬期休業			自らの進む道を考える	総合	「ライフプラン」宿題	
	4	1	11	自らの進む道を考える	総合	「ライフプラン」HR発表①	
		1	18	推薦入試採点日			
	5	1	22	自らの進む道を考える	総合	「ライフプラン」HR発表②	
	6	1	25	自らの進む道を考える	総合	「ライフプラン」HR発表会③・振り返り	
	7	2	1	1年間の学習内容を発表する	総合	「ライフプラン」年次発表会	
8	2	8	1年間の学習内容を発表する	総合	研究大会準備&リハーサル		
9	2	15	1年間の学習内容を発表する	総合	研究大会(授業公開+ライフプラン代表者発表)		
10	2	22	思考の深・広・鋭化～「学び」の共有～	ヒアリング④/総合	A 2年次への抱負、B 協働する力	年間振り返り	
	3	1	追考査日				
	3	8	卒業式				
計	37						

〈資料1 平成30年度「産業社会と人間」年間計画〉

平成30年度「産業社会と人間」活動予定 模式図



〈資料2 産社活動予定① (付けたいカベース)〉

自己	他者	社会	職業
4月:自分カルテ	4月:菜園づくり		
年6回:ヒアリング		6月:社会人講話	
		夏休み:職場見学・体験	
	7月:収穫祭		
		9月:産業研究	
	10月:学問・上級学校研究		
	11月:福祉講話		
	11月:特別支援学校との交流会		
	12月:科目選択		
1月:ライフプラン作成・発表会			
	2月:総合学科研究大会		
	3月:カナダ校外学習		

〈資料3 産社活動予定②〉

‘18 産業社会と人間

2018年6月21日実施

産社ヒアリング② 教員マニュアル

① ヒアリング実施の流れ 平成30年6月22日(金)5/6時限目

- ・前日6/21(木)冊SHRにて「事前公開資料」配布・SHRにて説明
- ・生徒は、指定の時間になったら各自各会場に移動する。
- ※別紙「各クラスの動き」に準じて生徒は社会人講話のお礼状を作成する

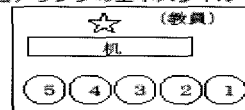
13:15 ? 13:20	出欠確認	<HR担当> 今野・吉岡・刘崎・斉藤 <会場作成> 古家・多田・藤野 安藤								
時間	ヒアリング	A	B	C	D	E	F	G	HR	
		B1Fホール			高デ	ビ実	多目的室			廊下等
13:25 ? 13:45	B組	多田	吉岡	刘崎	斉藤	藤野	古家	安藤	今野	
13:50 ? 14:10	C組	多田	吉岡	刘崎	斉藤	藤野	古家	安藤	今野	
14:15 ? 14:35	D組	多田	吉岡	刘崎	斉藤	藤野	古家	安藤	今野	
14:40 ? 15:00	A組	多田	吉岡	刘崎	斉藤	藤野	古家	安藤	今野	
終了次第、各会場の片づけをお願いします。										
15:00 ? 15:05	まとめ	各HR: <HR担当> 今野・吉岡・刘崎・斉藤								

② グループ分けと会場

*各グループのメンバーはランダムに分けているので、表の番号順のように並んで座らせる

グループ名	会場
A	B1Fホール
B	
C	
D	商業デザイン室
E	多目的室
F	
G	HR管理
H	

ヒアリングの基本スタイル



「グループ分け一覧(別紙)」の名簿の左から順に①～⑤番へ番席

〈資料4 ヒアリング教員マニュアル〉

産社ヒアリング②（質問項目と評価の観点）

「これからヒアリングを始めます。質問に対して、指名された人は簡潔に明確に答えて下さい。」

※ディスカッション中にチェックする事項

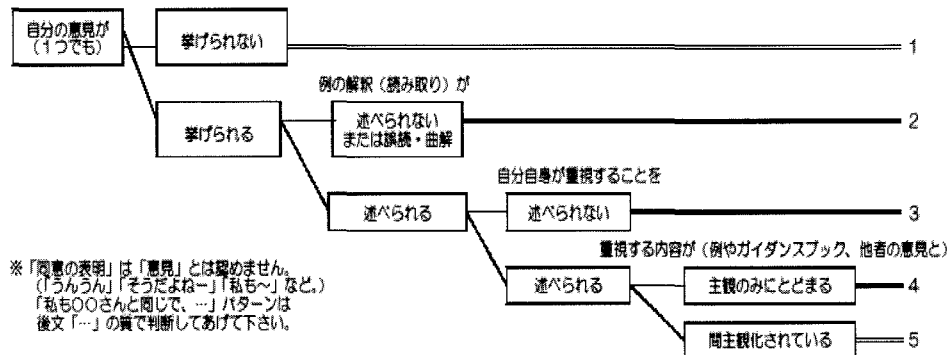
1. 言葉遣い・言葉の明確さ（両方で1点）	} 話す態度（0-2点）
2. 質問者の目を見て話しているか（1点）	
3. 質問者を見くびらないか（1点）	} 聞く態度（0-1点）
4. ヒアリングにふさわしい服装か（1点）	
5. 話を聞くときの姿勢はよいか（1点）	} 外見（0-2点）
合計	

【総合（キャリア設計能力・情報探索活用・意志決定能力・人間関係形成）】

質問1：事前に配布した3つの時間割選択の例がどのような意図で選択されているか、話し合いなさい。その上で、グループとして「時間割選択を行う上で大事なポイント」を1~3つ程度の内容にまとめなさい。

評価の観点

時間割選択の例について



「議論を円滑に進めるためのふるまい」について評価します。

A	<ul style="list-style-type: none"> 他者の意見を要約し(まとめ)たり、理解を確認したりする発話。(「それって、～ってこと?」「～みたいなことだと考えていい?」など) 意見を比較したうえで、統合したり、取舍選択したりする発話。 上記のうちの1種を満たす。(2種以上の場合は各自に加算しても良い)	5
B	<ul style="list-style-type: none"> 役割の積負(包含(手順やルールの設定・発話の促し)、記録、など) 「誰」の指定(話やすい議論)に資する行為(目・椅子を動かす、またその促し、リラックスさせる など) 異なる意見の提示(懸念点や疑問点を挙げる、「別の視点」からの意見 など) 積極行動(うなずき・あいづち・同意の表明 など) 明確的な発話(最初の意見・致 など) 上記のうちの3種~1種いずれかを満たす。(数に応じて1種類につき加算1)	4 ~ 2
C	上記のいずれも見受けられない。	1

(2) アイマスク活動

○活動の流れ

- ①クラスをまたいで、出席番号が同じ番号同士でペアを作る。(出席番号は適宜補充)
- ②各ペアで活動開始。どちらか一方が読書し、一方がアイマスクをつけて歩く。ただし以下のミッションを果たすこと!
- ③15分で読書役とアイマスク役は交替する。
- ④前半(AD)組は14:00、後半(BC)組は15:00にB館1Fホールに帰還する。
読書完成!(読めそうな場合は、アイマスクをもって戻ってきてよい。)
- ⑤最後に活動を通じて考えたことを記入する。

※各教室は授業中なので移動中は静かに!

ミッション1 (出席番号別) 次の経路で歩いてみよう! 行動してみよう!

(グループA: 偶数番2~20, B: 偶数番22~, C: 奇数番1~19, D: 奇数番21~)

A	B館(A館側)階段→2F→AC館渡り廊下→C館1F→中庭ステージ上の椅子に腰かける
B	B館(正門側)階段→2F→B館2F中央階段→昇降口→出たすぐの植え込みの處を歩く→中庭のベンチに腰かける
C	B館(A館側)階段→3F→B館を左回り一周→B館中央階段→AC館渡り廊下→C館→昇降口→多目的交流棟入ってすぐ右の部屋の電気を点ける(消す)→イスに座る
D	図書室に入る→新書を一冊とる→イスに座る→本を元に戻す→B館(正門側)階段→2F→昇降口

ミッション2 (ペアの構成別) 次の生活行動をしてみよう!

ペアの構成が(同性の場合)トイレに入り、洋式便所に腰掛ける
(異性の場合)水場で蛇口をひねって水を出す(水を止める)。

ミッション3 (自由選択) 次の場所のいずれかを選び、散策してみよう!

- ・産科の前の緑の椅子を廊下に置く。
- ・原会館まで行き、鳥居を小まめに散策する。
- ・虎退治まで行き、読書してもらって腰をノックする。
- ・通門(女子栄養大側)まで行き、読書してもらって南東館にタッチする。

①視覚障がいを持った方が校内を歩いた際に、最も危険だと感じるところはどこですか? 理由も含めて記入してください。

②アイマスクを付けた状態で生活上最も困難だと感じた行動は何ですか? 理由も含めて記入してください。

③読書をする側はどういった声かけや工夫が必要かと思うか?

④(全体を通じて)感想、考えたこと

【自己評価～達成スターの個数をぬろう～】
(できた) (半分) (できなかった)

積極的に読書に取り組んだか・・・ ☆☆☆☆☆

読書の内容がよく理解できたか・・・ ☆☆☆☆☆

アサーティブな表現を身につけよう

MEMO

【練習1】自分の長所・短所を言い換えてみよう

(長所) (短所)

短所のように→ 長所のように→

周囲の人にも言い換えてもらおう!

【練習2】『ドラえもん』の登場人物にならって自分の会話を分析しよう!

登場人物	類型	良い方向に働くこと	悪い方向に働くこと
ドラえもん	分析・本質直観型	誠実・中身のあふ会話	言い過ぎ・人格否定
のび太	本能直観型	素直・臨機応・確信的	無知・単純・わがまま
ジャイアン	理想論求型	果敢・推進力・粘れる	強暴・ごう棒
スネ夫	「空気」維持型	協調性・リスクヘッジ	卑怯・保身
しずか	()型		

(しずちゃん型会話)の特徴
相手の話や意見を()や() (する態度を示)しながらも、自分の話や意見も()と伝える。

☆自分の会話を(3日分くらい)思い返して、どの種類の発言が多かったか考えてみよう!

ドラえもん
のび太
ジャイアン
スネ夫
しずか

☆考えた会話を円グラフ化してみよう!

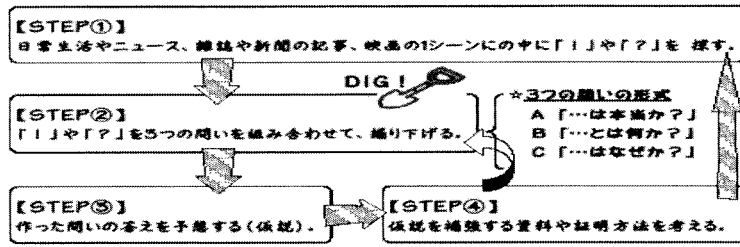
【練習3】「しずちゃん型発言」を身につけよう!

【練習1】パソコン室で使えるパソコンが残り1台
【練習2】登壇時のクラス企画で意見が出なかつたので、委員長さんが頑張って「校外一冊い。自分は今スタディサプリのやりかたが今日 販促(パレード)案を出す。でも、自分は今17:00に帰っている。

パレードをやりたいかな?

どう思った方がいいかな?

「問い」を立ててみよう！～カナダ校外学習に向けて～



たとえば…

- ・「パンクバーの休日」の1シーンから。 (1) キーホルに靴でごぼん (2) エミー(高知栄華)の髪入れられっぷり
- 「移民の2世は現地になじみやすい」
 - A「…本当か?」→予想:「本当(だと思う)。」
 - B「…とは何か?」
 - C「…なぜか?」→予想:「心理的距離的障壁が少ないから(だと思う)。」

・資料を探す!

Civil(社会)キーワード「移民」「2世」
 川野孝男「移民後世代の適応問題：世代間格差の日本比較」(2006年3月、大東文化大学『経済研究報告19』)

移民後世代とは、親に同行して移住してきた子供世代(1.5世と呼ばれる)および移住後に移住先で生まれた2世またはそれ以降の世代を指し、彼らが移住先の文化や習慣を習得して現地人と同等の社会経済的・文化的活動を行えるようになることを適応ないし適応(adaptation/adjustment)と呼ぶ。そして適応と区別して同化という概念がある。同化(assimilation)とは移民グループが文化変容(acculturation)によって出身地の文化を失い、コア・グループの文化を習得することである。同化論で有名なM・ゴードンは(中略)ヨーロッパ系移民の子孫は移民後3代ではほぼ確実に同化すると述べており、例外的に黒人、ラテン系、そして原住インディアンの間では格差の持続ないし収斂の遅れがみられるとしていた。しかし同化論はアンゲロ・サクソン系プロテスタントの白人(WASP)文化への準一化を強制するものとして、多文化主義によってなされた。(轉載部筆者)

- ・できること ○基本的な用語の学習 たとえば「1.5世と2世の区別」「適応と同化」
- 新たな「問い」の生成 たとえば「カナダは日本人は適応か同化か?」「アメリカ型の移民問題はカナダでは起きていないか?」

〈資料7 ワークシート「問い」を立ててみよう〉

課題研究活動計画書 評価シート

評価の観点(こんなところを見ています。)

A	課題(問い)の設定が…	B	調査方法が…	C	添付資料が…
	適切かつ発展性があります	先行研究をふまえた価値ある調査です	①信頼できる資料 ②課題との関連性 ③書き方 全てOK!		
	適切に設定できています	具体性もあり適切です	①～③のうち 2つ		
	課題のサイズや性質が適切ではありません	国内でも調査できる内容です	①～③のうち 1つ		
	何が課題なのかわかりません	どうやって調査するのかわかりません	何ひとつない		

- ※チェックポイント! 「適切でない」課題とは…
- ・ 論題が大きすぎる(「愛について」「カナダの環境問題」)
 - ・ 予想や予言(「2040年世界は…」)
 - ・ 「how to」もの(「授業を眠くならずに受けるには」)
 - ・ 調べたことの羅列(「カナダにはどんな先住民族がいるか」)
 - ・ 調べればすぐわかるもの などなど。

☆総合的に見てあなたの活動計画は…

予想以上の素晴らしい計画です。さらに大きく羽ばたいて下さい。	もう少しの努力と学習が必要です。これまでの学びを見直して下さい。
現段階で求められている水準に達しています。次の段階に進もう!	反省して下さい。

コース別課題研究 活動計画書【提出メロ:1月11日】

私の研究テーマ(コース別)	
研究課題	※「適切な」課題の大きさを、「簡明文」にすること!
先行研究(概要)	※このテーマ・課題について現時点で「わかっていること」を整理する
現地調査までに調べること	
現地調査の内容	※①現地で見聞きするポイント・キーワード(調査の観点) ②質問項目は聞き方(英語) まで詳述すること。
【主要参考文献】	

〈資料8 課題研究活動 左: 評価(簡易版)シート、右: 活動計画書〉